

II-1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

10月18日 飛鳥藤原第93次（飛鳥池遺跡）花谷 浩
3月13日 飛鳥藤原第95次（吉備池廃寺）西口壽生

飛鳥藤原宮跡発掘調査部が1998年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡5件、藤原京跡4件、飛鳥地域等15件である。学術調査は吉備池廃寺（桜井市教育委員会と共同）1件で、ほかは諸工事に対する事前調査である。藤原宮・京跡の調査件数が少ないのは、1996年度から続く（仮称）万葉ミュージアム建設に伴う飛鳥池遺跡の調査に力を注いだためである。以下、主要な調査を概観する。

藤原宮跡では、西北官衙地区（第94次）、西面南門（第96次）の調査を実施した。西北官衙地区は遺構が希薄で、宮期の小規模建物3棟の検出にとどまった。西面南門は、西面大垣柱穴列が途切れる約30mの間に位置すると推定される。

藤原京跡では、右京八条一坊（第90次）で、坪内の建物遺構6棟の他、西一坊坊間路東西両側溝を検出した。

飛鳥寺では、万葉ミュージアム建設の事前調査（第97次）で、寺城南辺東半の大垣と外周道路を検出した。

飛鳥池遺跡では、前年度から継続の谷南奥部（第87次）で、工房址下層の状況を確認し、古墳時代の竪穴住居跡等を検出した。また谷中央部（第93次）では、谷口近くに3時期の塀と石敷き井戸、東岸に飛鳥寺東南禅院所用瓦の焼成窯、100基以上の工房炉跡群等を検出した。谷には炭主体の工房廃棄物が分厚く堆積し、ここから70点以上の「富本銭」が出土して、和同開珎に先立つ「最古の鑄造貨幣」として注目を集めた。廃棄物層は全て土嚢詰めで取り上げ、洗浄・選別を行っている。

吉備池廃寺（第95次）では、西面回廊と推定中門の調査を行った。推定中門位置に中門は検出されず、南面回廊が連続しており、伽藍配置の復原に課題を残した。

なお、発掘調査にともなう現地説明会を以下の通り実施した。

（長尾 充）

4月26日 飛鳥藤原第87次（飛鳥池遺跡）小澤 毅

平城京の発掘調査

本年度の発掘調査は19件に上る。内訳は宮城内9件、京城内10件である。京内寺院域内の調査が6件と多いことが特筆できる。このうち、学術研究および史跡整備に関わる発掘調査は7件7136.5㎡、住宅建設等による緊急調査は12件882㎡である。

平城宮では、東院地区（第292次）において、3棟が連結した構造をもつ楼閣建物を確認し、第一次大極殿地区第Ⅱ期正殿と類似した施設が存在することが明らかになった。当地区には「玉殿」、「楊梅宮」として文献にあらわれる中枢施設の存在が推定されるが、これらが近隣に存在する可能性が高まった。

大極殿院の復原に関連して、大極殿西半部および西面回廊（第295次）、回廊西南隅（第296次）を調査した。

大極殿の規模、特に基壇に関する新たな知見を得、本格的にはじまった第一次大極殿地区の復原に有益な情報を提供できた。回廊部では大規模な木樋暗渠の存在が明らかになり、宮殿内の排水のあり方について情報を得た。

馬寮東方官衙（第298次）では、存在が予測されていた長大な礎石建物の規模を確定した。コの字型の建物配置をもつ大型建物群として「西池宮」として文献にあらわれる施設との関連を指摘する声もある。

平城京城は、寺院の調査が中心である。

興福寺では、平城遷都1300年にあたる2010年を目標に伽藍復興の計画があり、本年度より寺域内の調査を継続して実施することになっている。

中門の調査（第297次）では、規模や構造が明らかになった。また、絵図にみられる塑像の礎石や、地鎮を目的とすると考えられる遺構を発掘した。記録から、幾度もの焼亡、復興が知られるが、調査においても数度の改変

が確認でき、それを裏づけることとなった。

西隆寺(第299次)では、造営以前に存在した一条条間北小路、西二坊坊間西小路を調査した。また、古墳時代と考えられる掘立柱建物を確認した。

西大寺(第294次)、薬師寺(第293-8次)では、中世の貴重な資料を提供することとなった。

平城宮北方(第293-3次)では、掘込地業が確認され、宮北方の土地利用のありかたが伺える。

大乗院(第300次)では、絵図にある舟溜まりへの入り込み部と推定される池北岸部の様相を明らかにした。

なお、発掘調査の現地説明会を以下の通り実施した。

(金田明大)

6月13日 第292次(東院地区)	清野孝之
9月26日 第295次(第一次大極殿院)	蓮沼麻衣子
11月21日 第297次(興福寺中門)	次山 淳
2月20日 第298次(馬寮東方官衛)	玉田芳英

建造物の調査と研究

古代建築の調査研究 従来から継続している本研究は、とくに本年度から、これまでに蓄積された建築に関する調査研究、建築部材の出土遺物、保存修理工事の成果などをとくに、所内の共同研究として細部にわたる古代建築の技法の研究を中心に行うこととした。

当年度は瓦と屋根葺き仕様、礎石と基壇、木材加工と仕上げに関する調査をすすめ、とくに瓦と屋根葺き仕様の研究を中心とした。平城宮で用いられた丸瓦と平瓦の寸法、面戸瓦・隅木蓋瓦・戾斗瓦などの形状と寸法と納め方、さらに、軒先・軒隅・大棟・けらば・降棟・隅棟など各部の屋根葺き仕様も考察した(56~57頁参照)。今後は、木部の継手と仕口の形状、鴟尾の意匠と構造・大きさ・納まり、飾り金具の素材・加工・仕上げ・意匠、土壁の構造・材料構成・仕様、彩色などについて行う予定である。

また、東大寺転害門については、昨年の実測と観察からさらに考察をすすめ、昭和期の解体修理がどのように行われたかを、部材の取替の観察や精算書にみる施工方法などから分析し、忠実な現状維持とする方針であったことを確認し、その具体的な方法を明らかにした。

建物の調査は、海竜王寺五重小塔(軒廻り)、同西金堂(敷石)、唐招提寺金堂(鴟尾、小屋組)、平等院鳳凰堂

(翼廊)、恭仁宮大極殿跡(階段、基壇、礎石)、大宰府正庁跡(礎石と平面)などを行った。

平城宮建物復原実施にともなう調査研究 大極殿の復原実施設計に関して、構造実験用の原寸土壁模型の製作、次年度に実施する1/5の構造模型と屋根葺き実験用の原寸瓦葺き模型などの計画、実施設計図面の作成などにあたり監修を行った(63頁参照)。朱雀門脇の築地大垣復原施工の監修では、材料の選択、原寸図作成並びに木材加工、瓦などの原型作製、施工経過を確認した。

木造建造物の保存修復のあり方と手法に関する調査研究

本年度から7年計画で発足し、4部会からなる(50頁参照)。部会1は保存修復の体制確立のための研究とし、多様化する文化財建造物に対処する新たな体制と組織の研究。部会2は保存修復に関する考え方と手法の研究として、過去の修復を評価するとともに、多様化する文化財の今後の保存のあるべき考え方や方法をさぐる。部会3は参考となる海外の事例を調査研究する。部会4は保存事業にともない蓄積された学術資料の整理と保存活用方法の研究とし、文化庁ほかに収蔵された保存修復時の資料を再評価し、今後の活用方法を研究するものである。

各地の史跡の整備事業(建物復原)への助言・指導 新居関(新居町)、崇徳堂(伊賀上野市)、近江国庁(滋賀県)、津山城(津山市)などの遺跡整備における建物復原に関する助言・指導を現地において行った。

各地の文化財建造物の修復事業への助言・指導 大阪中之島公会堂(大阪市)、春日大社、今井町(樫原市)、脇町南町(脇町)、山口県旧県会議事堂(山口県)、西田橋(鹿児島県)などの保存修復にあたり、現地において助言・指導した。

(木村 勉)

書跡資料の調査と研究

継続して行っている南都諸大寺の書跡資料の調査は、1998年度は興福寺、薬師寺、法隆寺で行った。興福寺は『興福寺典籍文書目録第三巻』収録分である経函第61函以降のうち、第61、72、78函など調査未了であった分の調書を作成し、現在未撮影分の撮影を進行中である。

内容は、第61、72函は論議草、第76函は法華経である。薬師寺は特別研究欄で述べる。法隆寺は、寺側が進めている昭和資財帳作成の調査に協力するかたちで、古文書